LINES

naoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LINES

【Nコード】

N14910

【作者名】

naoki

【あらすじ】

自分の「異常」を隠しながら日常を生きてきた主人公 御神シギ。そんな日常は唐突に終わりを告げる。

プロローグとか思いつかない！

恋愛学園異能バトル！です！

どれだけ走っていただろう。

平和が日常であったあの頃を思い出す。

あの日常はもう戻らない。いや、振り向いて力を振るえば、つかの間の平和は手に入るかもしれない。

しかし、それはしない。これは、私の信念。

暴力からは憎しみしか生まれぬ。

それは、私の身をもって証明された。

だから、私は走る。

こうすれば、誰も傷つかないで済むのだから。

目を開く。視線の先には見慣れた天井。

半分開いたカーテンの隙間から外を見やる。

山の向こうから光が漏れ、黒い空を赤く染めていた。

体を起こし、目覚まし時計に目をやると、秒針は50秒を指していた。

(……………秒針なんて関係ねえよ)

再び視線を戻し、時計と分針に集中する。

6時10分。

早すぎる。いつもならあと一時間か、二時間は寝ていたところなのに。

なにか、変な夢を見た気がする。

自分じゃない、誰かが夜道を走っている。
なにかから逃れるような、そんな、夢。

でも、そんな淡い記憶はすぐに消えてしまった。
なぜなら、起床直後だというのに壮絶な空腹感を感じたからだ。
布団から這い出て、食料を探す。

が、見つかったのは賞味期限の切れた食パンだけだった。

（仕方ないか……）

カビは生えてないから害はないだろう。

そう高を括って食パンをかじる。

食パンを食しながら着替えを済ませ家をでた。

通い慣れたを一人歩く。

あたりに人の気配はない。

（ちよつと早すぎたかな……）

と思いつつも、今更戻る気にもならないので歩を進める。
ていうか校門あいてるんだろうか。

校門は辛うじて開いていた。

生徒一人がやつと通れるくらいの隙間を通り抜ける。

まず目に入ったのが水の溜まっていない噴水。

それからきれいな花の咲いた花壇。

それらを通り抜け、砂利の敷き詰められた中庭を横断すると昇降口
にたどり着く。

暗い玄関ホールを抜け、階段を上る。

この校舎の最上階である3階まで上り、教室を目指す。

誰もいないであろう教室の扉を普段どおりに滑らせる。

「おはよー、つてうわ！」

誰もいないだろうと思っていた教室から現れたのは、一人の少女だ
った。

「わっ！」

驚いたのは彼女も同じらしい。目を見開いて一歩後退る。

ガタンッ

「きゃ！」

今の音は彼女が、机に足を引つ掛けた音だったらしい。

彼女は机に足を取られ、仰向けに倒れそうになる。

「ちよっ、おい！」

咄嗟に飛び出して彼女の身体を支えようとする。

が、勢い余ってバランスを崩したのか、自分まで倒れそうになる。

(マズイ……………ッ！)

このまま倒れれば、彼女を下敷きにしてしまう。

それじゃあ、元も子もない。

必死で彼女の身体を引き寄せ、体位を逆転させる。

ガッシャーン

机を巻き込んで倒れたらしい。

背中を強く打ったのか。息が苦しい。

「いった……………大丈夫か？」

そう言つて腕の中の彼女を見る。

「あ、あ、はい、大丈夫、です……」

なんかテンパってるらしい。ちゃんと喋られていない。

「あ、あの、離してもらつていいですか？」

気づけば俺は彼女を抱き締めるような格好になっていた。

「あ、ごめん」

多分、力を入れすぎて痛かつたんだろう。

彼女の顔は赤くなっていた。

「あ、あ、ありがとう。びっくりしちゃって……………」

「ああ、うん。怪我してない？」

「うん、平気。御神君は…大丈夫じゃないよね」

ゆっくり起き上がるを俺を心配してか、彼女は近寄ってきて手を差し伸べてくれる。

俺は彼女の手を握って立ち上がる。

そして、一つの疑問を口に出す。

「ていうか、何で俺の名前知ってんの？」

彼女は再び目を見開いて言う。

「何でって…隣の席でしょ？」

そうだったのか…。

「じゃあもしかして、私の名前も知らない？」

「……………名前覚えるの苦手なんだ」

「嘘でしょ。席のことだって覚えてないのに」

ピンゴ！

「私の名前は蓮姫由理^{はつすひめゆり}。蓮の花のはすに、お姫様の姫に……………」

と、彼女は漢字まで丁寧に教えてくれた。

「君は御神志義君」

フルネームで押さえているとは。漢字も書けるんだらうか？

「漢字は無理だなあ……………」

読まれた!？

「ていうかなんで覚えてないかなあ。もう入学から1ヶ月もたつてるのに」

そうそう。言い忘れてたけど俺はここ、北岡高等学校の一年生。

今は5月で、ちょうど入学から1ヶ月つてところだ。

「H A H A H A……………。ところで蓮はいつもこんな時間に？」

「うーん……………」

「え、なに、どしたの？」

「なんか蓮ってカタイよね」

いや、初対面つてこんなもんだろ？

「だから初対面じゃないって」

この人は俺の地が読めるんだな。気をつけよう。

「…そういえば」

「だからさ、なんかニックネームで呼ぼうよ」

「やだよ」

「じゃあ姫ちゃんって呼んでね」

「無視かよ！てか姫ちゃんとかやだよ！」

「えー。じゃあ百合ちゃん」

「それで呼ばれて嫌じゃない？」

「じゃあ、はっちー！」

「蓮でよくない？」

「ダメ。うんよし。これにしよう」

変なのはやめてくれよ……。

「姫！！」

……………。

「どっ？」

「この沈黙が賞賛の方の沈黙だと思うのか？」

「よっし、けってーい！」

ああ、わかってたさ。俺に反論の余地なんて初めからなかったんだ。

「じゃあ早速呼んでみて！」

「……………姫」

「……………ツツツツ！！！」

死にたい……。

「じゃあ、これからもそれでよろしく！」

もう話かけまい。そう思った瞬間であった。

1 (後書き)

肝心の非日常に突入してませんw

授業の暇つぶしに書いた代物。

よって出来は良くないかと思われます^^;

見苦しい作品ですが、読んでくださった方、ありがとうございます！
もし連載の希望なんてありましたら、うpさせていただけます<

――>

五月。まだ肌寒い日はあるものの、最近は比較的暖かく、過ごしやすい陽気が続いている。

そんな春の陽気に包まれて、俺は授業中、完璧なまでに寝入っていた。

講師の吐き出す専門用語の羅列は子守唄のようであり、心地よく耳を通り抜けていく。

しかし、そんな平和な5時限目のひと時は、ある一人の人物によって打ち碎かれることになる。

その計画が着々と進んでいるとも知らず、俺はただ、偽りの平和を過ごしていた。

事件が起こったのは5時限目終了のチャイムが鳴り終わったときだった。

「ん…、もう終わりか…」

そう思っただけで起き上がる俺に事態を気づかせたのは、一人の女子生徒の小さな“笑い”だった。

「ん、なんだ？」

振り返ると今度は背後から笑いが起こる。

俺は不思議に思い、辺りを見渡した。ドツと笑いが起きる。

(この雰囲気…、ハッ、まさか!?)

そう思い背後に手を回し、背中を探る。が、予想に反し、背中には何もついていなかった。

と、視界の端ににこにこ笑いながら俺を見つめる少女を捕らえる。

「おい、蓮。何しやがった？」

「ん…、なんて〜？」

「だから何したんだって聞いてんだよはち……………っ！」
ここで一つの仮定が浮かび上がる。

(もしかして蓮ってよんだからか…?)
だとしたら…まずい。

「(おいなにしたんだよ、“姫”)」
俺は周囲に聞こえないように注意しながらたずねる。

「ちよつと聞え辛かったかも」

こいつ…………。

背後の女子生徒が携帯を俺に向けようとする。

マズイ…………ツ!

この際仕方ない。

「なにしたんだよ、姫!」

刹那、場の空気が固まった。

が、そんなこと気にしてられない。

姫は自分の髪の毛を掴んで引つ張るといふ仕草を両手でやっていた。

ハッ!

俺は慌てて自分の髪の毛を探る。

すると手には恐ろしい感触が。

恐る恐る引つ張ってみると、そこにはピンク色の玉が二つ付いた髪留めが2セット。

このおぞましい物体は今まで俺の髪に付けられていたらしい。

「可愛かったよ?」

「姫…:テメエ…………」

でこピンでもかましてやろうかと思った矢先、俺は周りの野次馬ども(クラスメイト)に取り囲まれる。

『おい、姫ってなに?お前らどういう関係?』

『そんな…:御神君、蓮さんと…………?』

『泣いちゃだめだよ。まだチャンスはあるって!』

こいつらなに?しかもなんか途中でうれしい会話聞こえたんだけど。

その間に姫はどこかに姿をくらましていた。

くそ、悪魔め！

これからはおちおち昼寝もできないじゃないか！

『おい、御神！』『御神君！』

うるさいなあ！

友達の少ない俺は、こんな大勢に名前を呼ばれることはまず無い。もしかして姫は、全部見越してこれを行ったのだろうか？

友達の少ない俺を気遣って？

考えすぎか。

だって、俺の周りにいるやつらはこんなにも鬱陶しいんだから。

夕方。授業が終わり、下校する生徒であふれる昇降口。

こんなむさ苦しい場所で俺が何故、立ち尽くしているかというと…

……

まあ、あの悪魔に起因するということとは言つまでもない。

ぼーっと突っ立っていると、向こうから走ってくる人影が。

「おい、御神くん。待った？」

「ああ、かなり」

「もう、男の子なら、今来たところ、とか言おうよ」

「男女差別だ」

「じゃあ、人として、今来たところ、とか言おうよ」

「なんか傷つくな…」

なんでこいつと喋ると、コントみたいになるんだろうか。

ふと、彼女の後ろにも人が居ることに気づく。

「ってあれ？咲良じゃん」

「やっと気づいてくれた…」

と、苦笑いしながら出てくる少女。

「あれ、知り合い？」

予想外の出来事に、目をぱちくりさせる姫。

「ああ、うん。幼馴染なんだ」

「そうなんだ？わたしたち友達だから、紹介しようと思ったんだけど、必要なかったね」

「用ってそれか？」

「それもあつたけど」

「他にもあるのか？」

「うん、一緒に帰ろうかなーと思って」

「……………ごめん、急用思い出した」

「ちよつとベタすぎない？」

「まあ、確かに……………ってしまった！」

姫はニヤリと笑う。

「咲良もいいよね？」

「うん」

自らの過ちを悔いる俺を半ば引きずるようにながら、姫は言う。

「御神君の家つてどの辺？」

「中国あたり」

「じゃあ方角は一緒だね！」

「……………」

ダメだ……………。

俺にどうにかできるレベルじゃない。

「じゃ、行こっ！」

そう言っただけにこにこ笑う姫。

こいつには振り回されてはっかだけど、こいつの悪くないな、と。

そう思わせるような笑顔が、そこにはあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1491o/>

LINES

2010年10月9日13時30分発行